ポスター

学校検診②

座長:高木 純一 (たかぎ小児科・心臓小児科)
2015年7月16日(木) 17:20 〜 17:44 ポスター会場 (1F オリオン A+B)
I-P-147〜I-P-150
所属正式名称：高木純一(たかぎ小児科・心臓小児科)

[I-P-147]学校心臓検診における心房中隔欠損診断に有用な心電図所見

○中田 利正 (青森県立中央病院　小児科)

キーワード：atrial septal defect, electrocardiogram, screening

【背景】学校心臓検診における心房中隔欠損(ASD)診断には、右脚ブロック(RBB)のみでは限界があり、crochetage pattern(CR)などの組み合わせが有用であることが報告されてきた。【目的】学校心臓検診におけるASD診断に有用な心電図所見を明らかにすること。【方法】 当科で2008年月〜2013年に診療した学校心臓検診要精査対象者のうち、71例を対象とし、後方視的に検討した。閉鎖適応のある ASDが新たに診断された10例をASD群、基礎心疾患がなく RBB所見を有した61例を対照群とした。 RBBは V1誘導所見で rSR'型と Rsr'型に分類した。 QRS＜0.12secを不完全 RBBとし,下壁誘導の R波（下降脚を含む）に notchを認めた場合を CR陽性とした。【結果】 ASD診断時年齢は小学校１年時８例、中学校１年時２例であった。 ASD群 vs 対照群の性比（男/女）は6/4 vs 42/19、診断時年齢（歳）の中央値は7 (6-14) vs 12 (6-15)でともに有意差はなかった。不完全RBB、 V1QRS波パターン、下壁誘導における CRの有無と数、 V4誘導の陰性 T波(NT)の有無、右軸偏位の有無を両群間(ASD群 vs 対照群)で比較検討した。有意差が認められたのは、 NTの頻度(70% vs 0%, P＜0.001)のみであった。下壁誘導すべてに CRが認められた(3CR)頻度に有意差はなかった（60% vs 26%, P=0.06）。 V1rSR'の頻度も有意差がなかった(70% vs 80%)。 RBBに NT,3CR、右軸偏位を組み合わせた ASD診断感度は、各々、70%、60%、50%で、特異度は、各々、100%、74%、62%であった。【考察】 CRは加齢に伴い，増加する所見であることが指摘されている。対象を学校心臓検診要精検小中学生に限定した今回の結果では、RBBに組み合わせる心電図所見としては、 CRよりも NTがより有用であると考えられた。【結論】学校心臓検診における ASD診断のために、 RBBに組み合わせる心電図所見としては、 NTが有用であることが示唆された。

©特定非営利活動法人 日本小児循環器学会